

安全地帯から抜け出すことの難しさについて

—学校緘黙児が交流的スポーツ活動の場で見せた努力と怒り—

On the difficulty of coming out of the psychological safety zone

—Efforts and anger that a girl with elective mutism showed
in the interactive sport activities—

石川 尚子¹⁾ 関 亜希子²⁾

Takako ISHIKAWA and Akiko SEKI

Abstract

An extremely strained body, lack of expression and anthropophobia in interpersonal relations are characteristic of the children with elective mutism and they cause great difficulties in social maturity. The first author is assure that to solve the various mental problems which have caused elective mutism is more essential than to directly aim at getting to speak for dispelling elective mutism and nonverbal methods such as Interactive Sport Activity or Dosa Method might be effective as the cure to foster their social maturity.

This study deals with a case of a girl in the second grade whose body tension was extremely high and who showed stiff movements and anthropophobia. We analyzed the process and the result of the practices of interpersonal sport activities to make her internal state better. By analyzing how she has changed in various types of given situations, we aim to contribute to clarify the psychological mechanism of showing the symptoms of elective mutism and its cure.

During the period of a year and seven months, she continued to join the activities though she still had strong anxiety, fear and a high state of tension. She has gradually come out of the psychological safety zone that strongly protected by her parents or others around her and has made efforts to live and cope with others. It was considered that using dolls or imitated sounds as mediation or losing her temper harshly have some effects on her changes.

keywords : *elective mutism, interpersonal sport activities, stiff movement*

I. はじめに

場面緘黙とは、話す機能や言語理解能力があるにもかかわらず、特定場面で口を閉ざして話さない状態であり、子どもの場合、幼稚園・学校場面で話さないことが圧倒的に多いため、学校緘黙ともいえる。喋らないのは弱点を知られることへの不安回避のためであり、できるだけ目立たないようにして自分の存在を消そうとしていると考えられる。しかし、喋らないことで自己防衛することは、言語コミュニケーションを回避して生きることになり、発達の問題は大きい。とくに、仲間との対人的葛藤を通して学習される社会性や自己意識が育ちにくいことが問題である。また改善は困難で、話すことへの激励・強要、あるいは声を出し

た時の賞賛などは一層口を閉じさせ、話した方がよい場面をすばやく察知・警戒させることが多い。この過度の緊張と警戒は、全面的な受け入れ態勢を整えた治療の場でも特定の人以上に心を広げさせず、性格的な頑固さもあって治療を難しくしている。

石川 (Th. I) は、これまでの臨床活動を通して、緘黙は不安を中心とした内的状態の結果であるから、話すようにさせることよりも、緘黙を形成させた心理的諸問題の解決によって、緘黙を必要とする内的状態を改善することの方が本筋であると考えている。不安感や警戒心の解消により情緒の安定、社会性の発達、身体的緊張の解消を目指すのが先決だということである。そしてこの考えのもと、非言語的媒介を有効とみなして、スポーツ活動、姿勢や動作の学習・改善などを通して、他者との交流や共感の中で学習が起る形を工夫してきた。

1) 日本女子体育大学 (教授)

2) 聖徳大学幼児教育専門学校 (助手)

本研究は、場面緘黙についての新たな知見を得るためのケース研究である。幼稚園時代から家庭外では全く喋らず、他者と関わらず、身体を極度に緊張させてぎこちない動きで生きてきた小学校2年生の女兒に対して、内的状態の改善を目指して交流的スポーツ活動や動作法に関わり、そこで起ったことを分析することを通して、発症の原因や改善に向かうプロセスを考察しようとするものである。

II. 対象児の概要

対象児：S子（7歳0ヶ月～8歳7ヶ月）

対象期間：X年5月上旬～X+1年12月下旬

家族は両親、本人、弟の4人。吸引により2700gで誕生。発語は12ヶ月頃、歩き始めは1歳3ヶ月。1歳6ヶ月から子育てサークルに入ったが、他児とは全く関わらなかった。3歳10ヶ月で入園。一切喋らず、泣き続けて園バスに乗せられないこともあった。4歳10ヶ月（年中）で担任が変わるとその先生を好きになり、少し安定したが、6歳（年長）でクラス替えと担任交代があると、再び腹痛を起したりバスに乗らなかつたりし、強引に乗せて園まで送ったり1週間続けて欠席したりが繰り返された。みんながやっていることが理解できないようで、いつもおろおろしていた。入学（6歳10ヶ月）後も全く喋らなかつた。いつも同じクラスのEの後ろにくっついて歩いていたが、いつしかEは離れていった。

住んでいるH市の教育相談室に1年生5月から2週間に1回通い始めた。初めは相談員のK(Th.Iの研究室卒業生)と関わらず、ひとりで人形遊びをしていたが、やがてホワイトボードに伝えたいことを書いたり、嫌な事は両手でバツをしたりし、8ヶ月頃には自分から交換日記を始め、まもなく人形を話題にして盛んに会話を始めた。こうして小空間での安定と交流が見られたため、Th.IとKの間で次の段階として小集団での体験が有効であるとの判断がなされ、2年生5月から交流的スポーツ活動に参加することになった。

III. 活動の概要

交流的スポーツ活動 2年生 5～12月

交流的スポーツ活動・個別活動 1月～3年生12月

1) 交流的スポーツ活動

<活動目的>

Th.Iの研究室では、その責任・監督のもと、問題児や障害児と個別援助者との心理的交流を核とした療育的な集団スポーツ活動（交流的スポーツ活動）を20年前から行っている。活動目的は『この場が対象児たちの安定できる居場所となり、情緒の安定がもたらされることによって、発達上の問題の改善や望ましい学習がなされること』である。

<活動の方針>

対象児ごとに個別援助者（研究室学生）が付き、集団的スポーツ活動の中でその子に必要な援助を行う。①受容的に接して信頼関係を作る。②情緒的に不安定な時は制限を最小限にする。③学習が可能だと判断できた時には望ましくない行動を制限し、レベルに合わせて指導する。④関係性・自発性を引き出すような喜びや楽しみを工夫する。⑤表面的行動に振り回されず、行動の意味を理解して対応する。

<活動形態とプログラム、記録>

形態—対象児（約10名）、個別援助者、Th.I、補助スタッフによる集団活動として、体育室で行う。

運動的課題活動—対象児たちのレベルや状態を考慮して計画し、リーダー（交代制）が進行する。主な課題内容は、始め終りの挨拶運動、体操またはダンス（身体の使い方）、集団ゲーム（他者との関わり）、各種スポーツ技能（技能の向上）である。

自由遊び—やりたい遊びや運動を思い切りやれる時間を前後に設ける。遊具（トランポリン、ボール、ラケット、人形…など）は自由に使える。

記録—VTR撮影と個別援助者による観察記録。

特別活動—秋の山登り（子ども達とスタッフ）クリスマス会（親も参加する親睦運動会）。

<ミーティング、ケース・カンファレンス>

活動後・活動前ミーティング…内容・やり方の反省と検討、次回の活動計画、確認と配慮事項の連絡などを行う。ケース・カンファレンス…子どもの状態の見立てやその時々適切な対応方法などを押さえていくために、活動後ミーティングの後、原則として1回に1ケース（約1～2時間）を行う。

2) 個別活動

S子の場合、交流スポーツ活動以外の個別の援助が必要と考え、別日に動作法（Th.Iがトレーナー）、人形遊び、箱庭遊び、お喋りなどを担当者(T)と行った。また日常的行動の観察も兼ね、TがS子を最寄り駅まで送迎した。

IV. 活動経過

(以下、【 】は考察である.)

第I期：#1～#3 (X年5月～6月) 全3回

#1. 母と教育相談室のKと共に体育室にやって来て、母にくっついて身をかがめて入り口に立ち、うつむいたり前髪の間から室内を覗き見たりした。Kに誘われくっついて遊具置き場に行ったS子に、個別援助者となったTがタイミングを見計らって声をかけると、ちらっと顔を見て慌てて背を丸めて顔を隠したが、やがて割と自然に「ウン」と応じた。小さいスケボーに誘うと、迷いながらもそっとお尻を乗せ母親の周りを漕いで動き、別のボードに乗ったTが真中に向かうと、肩を上げ首をすくめ、目だけを動かし付いてきた。Tが横向きに座り直し、「かにさん」と言って横向きに漕ぎ出すと、自分のボードの絵を指差して「カニジャンクテ、カエルダヨ」と、割と太い声で早口にぼそそと言った。ラジオ体操の時「夏休みにやった?」と聞かれると、顔を向けずに「ソナノ知ッテイル、アーレカ」と低い声で言い、みんなの方を見ていた。しっぽ鬼が始まると「アレハシッポヲツケテ走ルンダヨ」などと説明し、誘いを拒みながら参加しているかのようにみんなを見ていた。#2. 硬い表情で入室。前回Tが軍手人形を作って見せたからか、手袋人形を持参し、人形になりきったように高い声で話し始め、人形の家を作った。Tが小さいスケボーを持ってきて「旅に出よう」と誘うと、嬉しそうにその上に人形を乗せてからその人形を自分が持って座り、体育室の壁伝いに他児に近づかないように漕いだ。ランニングが始まったので誘うと、すぐに来てTの後ろに隠れるようにくっついて走った。腕を固め全身を緊張させて棒のようになって走るのので、「Sちゃん、手を振ってごらん」と声をかけると、手首から先をぶらぶらと体の前で振った。Tが慌てて「腕だよ」と腕を前後にオーバーに振ってみせると、上目使いに見たが直らなかつた。ラジオ体操やダンスでは、張り切って一番前に出た。#3. 入室すると鞆の中から沢山の人形を取り出し、「キューキュー」とアニメのキャラクターのような声でTに見せ、「家ニハモットイッパイアル」と言った(この日以降、入室してしばらくは「キューキュー」で応じた)。リズムは狂っていても楽しげだったダンスで、リーダーが動きの順番を何回か訂正するとパッと表情を変え、頬をふくらまし口を尖らせてしゃがみ込み、「ウーウー」と怒り出した。しかし、自由遊びになり「遊ば

うか」と声をかけると、何事もなかったかのように人形で遊んだ。

インテーク期のアセスメント：①慣れない場面に対する不安・緊張が非常に強い(とくに対人恐怖)。②簡単な動きでも指示通りに動けないが、できると思っている。③みんなと同じようにやりたいし、頑張る決意もある。④遊びたいし、よく遊べる。⑤気に入らないと癩癩を起す。⑥興味は人形遊びの段階である。

第II期：#4～#8 (6月上旬～7月中旬) 全5回

毎回家から沢山の人形を持参し、Tに全部見せ、人形について喋ってから、人形で家族や友達のごっこ遊びをした。他の遊びに移っても人形は離さなかつた。自分から話す時は言葉だったが、答える時は人形を動かしながらの「ギュー、ギュー」であり、スタッフに「その人形かわいいね」などと言われると無言で人形を相手に向けて動かした。みんなに背を向け大縄に入る練習をした時、Tが後ろからそっとS子の両腕を抱いて向かい縄のリズムに合わせて前後に揺らし、中に入るタイミングで軽く押すと上手く入れ、ぎこちないながら跳ぶことができた。嬉しかったのか再挑戦したが、膝も腰も固めて着地を焦って跳ぶのでリズムがどんどん狂い、ひっかかると「疲レター」と床に倒れこんだ。#5. 集団ゲームではこれまでTにぴったりくっついて逃げてばかりだったのに、この日の転がしドッチボールで「外野ガイイ」と言った。ボールは弱々しくて当たらなかつたが、転がす度に嬉しそうに何度もジャンプをしたり、夢中で転がって来たボールを見ながらTから離れて拾いに行き、同じようにボールを追いかけてきた他児が自分の近くにいるのに気付いてさっと戻ったりもした。説明を聞く時、リラックスしてきた。七夕リレー(中間に置かれた袋からアイテムを取り出し、前方の大きな絵に貼り付ける)では、他児を大きな声で応援し、自分の番で袋から織姫が出てくると「ワーッ!」と歓声を上げ、みんなに見せ、しばらく興奮が冷めずに喋り続けた。【人形へのこだわりは幼稚に見えたが、人形は不安を消す役をしているようであった。大縄を跳べたことは非常に嬉しく、挑戦心を強めたようで、ぎこちない跳び方で体力の限界まで頑張っている。また、ドッチボールで外野を選んだのは、ボールに当たる怖さを回避するためであろうから、考えて行動していることがわかる。ボールが他児に当たっている訳ではないのに大喜びしているのは、自分の方から他児に攻撃ボールを出したこと自体が嬉

しかったからだと思われ、本当はゲームが楽しめるし、みんなと楽しさを共有したいことが分かる。】#8. 来るとすぐ人形を出し、人形にボールを蹴らせては次に自分も真剣に蹴った。ドッチボールになるとコート of 広さを確認したり、逃げる練習をして内野を選んだが、始まるとボールの動きを見ることなくひたすらTの腕を掴んで走った。Tがボールに当たったので励まして外野に出ると、付いて来ないで初めて一人で逃げた。その時、加減したごく弱いボールであったが、当てられてしまった。一瞬固まったかのような間した後、S子はポー然としてコートの外に出ながら突然「ギャーッ」と大声を上げ、赤ん坊のように泣き出した。Tが横に行き座ると膝の上に泣き崩れ、「モウ、ヤラナイ」「ヤダー」と叫び、全身を固めてその場から離れようとした。Tが抱きしめると、両手をぎゅっと握り、「ウーウー」と唸りながら時々歯軋りのような音を立て、Th.Iにドッチボールは当たるものだとと言われると、「ヤダーッ」とさらに大声を上げた。その後ダンスになっても「絶対ニ入ラナイ」と頬を膨らませ、「ウーウー」と低く唸っていたが、みんなの様子は見ており、自由遊びになった時遊びに誘うと、何事もなかったかのようにいつもの人形遊びを始めた。【当たった瞬間は何が起ったのかわからず、そのうち当たったことが意識されて恐怖で泣き叫び出したようだった。恐怖はすぐに激しい怒りに変わった。それは、ボールが当たることを全く予想していず、予想外のことが起ったことは許せなかったからだと思われる。考えてみれば、前回には外野でゲームのイメージを掴み、この日は入室するとすぐ人形にボールを蹴らせてから自分も蹴ることで、自信がないボール操作の不安を弱め、直前には逃げる練習すらして内野に入ったのであった。こうして自分なりの努力をし、自分なりに上手くいっている感じだったのでボールが当たったのである。そしておそらく、S子はTが抜けて内野に一人残ることがあることなど全く考えていなかったと思われる。もしかしたらS子は、混乱し裏切られ感すらあったかもしれない。これまで怖いことから守られてきたS子にとっては、まさか起るはずのない事が起ったのであるが、この受け入れ難い出来事を受け入れられるか否かという分岐点で、怒り狂いながらも逃げ出すことはなかった。】

第Ⅲ期：#9～#17(9月上旬～12月中旬)全9回

夏休み明けの#9は、表情をこわばらせて入室し、話しかけても目を合わせなかったが、鞆から沢山の人形

を一つずつ出す度にTが驚きの声を上げると、漸く「キュー、キュー」と高い声を出しながら顔き、人形を抱いて小スケボーに近づいていつもの周遊遊びをやった。ドッチボールになった時、前回の痼癪のことがあって案じられたのだが、S子はいそいそとチームやコート of 位置を確認し、内野を選び、しかし始まるとTの腕をがっちり掴んで、自分のチームにボールがある時ですら逃げまわるという行動を通し、逃げ通せると「ヤッター」、「当タラナカッタヨ」と目を丸くしてTの目を見た。2回戦はすっかりした顔で外野を選び、投げた弱々しいボールが相手に当たらないと悔しがり、終ると「スゴク疲レタ」と座り込んだ。【久し振りだと、Tに対してすら人形を介在させている。ドッチボールでは、前回と同じ目に合わないための作戦を立ててきて取返して危険な内野に再挑戦し、上手くいくと感激しTに共感を求めている。この後安全な外野に戻ったし、「スゴク疲レタ」ので、S子にとって勇気のいる大きな挑戦だったことが分かる。しかし、立てた作戦はTの保護を確実にしようとするものであり、自立への山を越えたわけではなかった。一方、興味は、他者を攻撃するだけから一歩先の当てることに移っている。】体育の日、グループの子ども達全員とスタッフの総勢32名による倉岳山ハイキングであった。最寄り駅へ迎えに行き、母と別れて二人になると、「Sネ、山登りハ初メテ。パパモママモ山登りシタコトナインダッテ」「パパヤママガヤッテナイコトヲスルナンテ、Sッテスゴイヨネー」と言った。電車を降りて歩き始めると、自然に手を繋いできて速いペースで歩き、先頭に行きたがり、山道に入っても小さい沢を慎重に渡って「ヤッター」と言うなど元気が良かった。しかし、道が少し険しくなると「疲レター」と膝に片手をつきながら歩いたり、話す声も小さくなり、さらに足場が悪くなると、「大丈夫?」と聞いても「ウーン」と小さな声を出すだけになった。少し大きな沢に架った1メートルあまりの丸太橋に来た時、突然大声で泣き出し、「ヤダー、コワイー」と体を硬直させた。両手を持って誘導しても固まって動かず、泣き方がエスカレートする一方なので、Tが覚悟を決め、抱き上げて渡ろうとすると、Tの肩に爪がくい込んだ。渡った後も泣きべそをかき続け、急斜面で一人通るのがやっとの道幅になっても絶対に手を離さなかった。休憩の所でも「モウ、ヤダー、カエルー」、「カエルノー」、「山ナンテ大嫌イ」と泣き叫び続け、怒った。どうにもならないと諦めてゆっくり登り始めてからも、Tの「あともう少しだよ」など

の言葉に、「山ノバカヤロウ」を繰り返して、雨が降り出すと「ナンデ雨フルノー」と空に向かって怒鳴った。到着した子ども達の励ましの声を聞いても返事しなかったが、山頂に着いた時の表情はにこやかで、雨の中お弁当を残さず食べた（学校の行事の時はよく残す）。雨が強くなり、早目の下山となった時、下りの難しさを考えてTは覚悟したが、S子は全く別人だった。「山ッテ楽シイ」と言い、滑りやすくなっている所を指差しながら、「ココニ足ヲ置クトイイヨ」と歩きやすい所をTに教えた。2人で声を合わせ「次ハココ」と歩いていると楽しくなったらしく、大声で笑った。平らな大岩の上で滑ってひっくり返ったのに何も言わずにさっと立って歩き始めた時、驚いたTが思わず「よく泣かなかったね。」と言うと笑顔を見せた。誇らしげに見えた。ハイキング後は、自分から「コンニチワ」と挨拶をして、遊具の置いてある場所へ行ったり、全員で手をつないで輪を作る時、隣の他児と自然に手をつないだ。集団ゲームで順番を決める時は、「最後ガイイ、心ノ準備ヲスルカラ」と言った。クリスマス会当日のダンス発表では、それまで決してやらなかった他児と手を合わせる動きをすんなりやり、終ると何度かその場でジャンプした。【両親も経験のない山登りに挑戦する喜びと期待に興奮状態でスタートしたが、これはまだ山登りを知らず、空想の山登りの中にいたからであった。どこまでも続く山道に疲れを感じ、心細くもなっていた頃に出くわした勢いよく流れ落ちる沢に架かった丸太橋は、全く予想していなかった未知の脅威に満ちた現実の場面であり、激しい恐怖が襲ったに違いない。しかも、そこを保護されて越えても終わりではなく、泣いても喚いてもどうにもならなかった。しかし、逃げられなかったからこそS子の「コワイ」はやがて「ヤダー」に、そして力強くも「バカヤロー」に変わり、山頂に着いた時には恐怖も嫌悪も怒りもなく、頑張り切った達成感でさわやかになっていたと思う。下山は登りよりも悪条件だったのに、自信と楽しさがあふれていた。恐怖を乗り越えるプロセスとその意味が絵巻のように示された体験であった。これまでは分からないことややりたくないことは周りに助けってもらったり、やらずに済んでいたのが、怖くても腹が立っても逃れられず、誰にも代わってもらえず、想像との混同もあり得ないという厳しい外的な環境条件によって、これまで全く経験した事のない“自分が頑張るしかない”場面に直面させられ、恐怖と怒りに狂いながらも乗り越えられ、成就した自分に出会うことが出来

たと言えるだろう。そしてその成果は、ハイキング後にきっちり現れていた。山登りは、自立に向けての強烈な洗礼となり、守られようとするのではなく、自分で対処しようとする礎がS子の中に作られたように思う。また、Tとの信頼関係も強まった。】

第IV期：#18～#22 (X+1年1月～1月末) 全5回

母親面接で、S子独自の問題に応えるための個別活動も合わせて行うことになった。#18. 個別活動の初回、迎えに行ったTと大学に向かう電車の中で、S子は鞆から人形をいくつか出してTにも一つ渡し、周囲が見ていることを気にせず、驚くほど大きな声で人形になりきって話した。研究室に近づく緊張したが、入室して「ダンボールを使って秘密の基地を作らない？」と誘うと、「ウン」と笑顔になった。2人でダンボールに絵を描いたり、「暗号を言って下さい」と貼り紙したりしていると、「コノ基地、壊サレナケレバイナ」と呟いた。#20. 入室しても人形を出さず、二本のコーンの間にボールを投げたり蹴ったり、少し離れた所から1～2歩の助走をつけて思い切り蹴ったりした。軸足をボールのすぐ横に踏み込ませるし、蹴り足の振りも小さいので、何度やってもボールは弱々しかった。【人形を取り出さずにボール遊びに入ったことで不安なく動けるようになったことが分かる。Tと秘密の空間が作れたことは大事なことだったようである。一方、運動は下手なままであり、動作感覚が未発達であると思われた。】#21(個別)。「目が悪イカラ席替エヲシテモイツモ一番前ノ席ナンダ」と、電車の中で初めて学校の話をした。#22. 名前を呼ばれて「ハイ」と大きく返事したので誉めると、「グッテココデハ大キナ声ヲ出スンダモン」と言った。ゲームの時も大きな声で合図した。ところが、こうして頑張った活動が終了し、帰らずボールで遊んでいる時、ボールが背中に当たってしまった。S子が母親にしがみついで小さな声で泣き出した時、Th.Iが「ボールを投げていきなさい、そのまま帰るとイライラするから」と言うので、すぐ立ち上がりボールを蹴り、腕を強く振り下ろしながら足を思いっきり踏み鳴らし、籠の中のボールを床に投げつけて、母親を叩き、再びTh.Iに誘われてコーンに向かって大玉を思いっきり蹴り、近から投げつけ、倒れないと手で張り倒し、立て直されると繰り返し蹴り倒した。漸く止めて大玉に突っ伏した時、Tがゆっくり揺らすと、全身の力が抜けていった。【電車の中では平気で喋れるのに、学校のことを一言口にしたのは

来室して8ヶ月目の#21が全く最初であるところに学校緘黙の特徴がよく現れている。ボールが当たって激しい癇癩を起したが、これは学校で出せない勇気をここでは出そうとし、頼りたい人形に頼らずに頑張って達成感を感じていた時にボールが当たり、全て台無しになったようで我慢がならなかったからであろう。また、前向きでいることは、S子にとっては常に頑張ることなので、緊張が蓄積して癇癩をエスカレートさせたとも思う。漸く人形を間に入れなくなったことが示すように、ここでは素の自分を出す決心をしているが、だからこそ頑張りを無にすることは怒りを抑えられず、周りに自分の気持ちをわからせようとするかのような癇癩を起したと思われる。癇癩は、効果的な発散作用になっていたようである。】

第V期：#23～#33（1月下旬～4月下旬）全11回

#23（個別）の箱庭。柵で囲んだ中は海水浴場で、動物達がいる。そこに観音様を持ってきて置き、「ココハ温泉ガ出マスヨ」と言いながら砂を掘り、「アー、気持ちガイイ」と動物を中に入れたり、同じ動物ごとに並べたりした。#25。バスケットボールのパス練習で、傍にいる子供同士で組むように言われて組もうとしたが、その子が他の子と組むと、とたんに表情を硬くし、相手がいないとわかるとパツと輪から外れて怒りの表情になった。周りにいたT達が「一緒にやろうよ」と誘うのを拒み、みんなに背を向けて足を抱え動かなくなった。自由遊び時間になると母の所へ行って小声で泣いたが、Tがマットの方に呼び、マットに座らせて母と四隅を持って揺らすと泣き止み、笑い出してボール蹴りを始めた。#26（個別）。電車の中で、「乱暴ヲスル子ガイテ、ミンナソノ子ノ近クニ座リタクナイダ」と言い、下車して歩きながら「男ノ子デS子ノコトヲイジメル人ガイルダ」とぼそつと言った。「どんなふうにいじめるの？」と聞くと、「蹴ッテクルノ」と言い、「ひどいね、仕返ししてやりたいね」と言うと、「コウヤッテ、仕返しシテヤリタイ」と蹴る真似をした。バスを降りた時はどしゃ降りだったので雨の中を二人で走ったが、S子は「楽シイネー、子ドモハ風ノ子」とはしゃいだ。研究室の学生の声がけに笑顔でピョンピョンはねながら奥の部屋の箱庭コーナーに行き、Tが少し離して置いた2つの箱庭の箱をくっつけると、始めは両方の箱で遊んだが、やがて自分の目の前の箱に天使のコンサートを動物たちが聴いている情景を作り、Tの前の箱には「ココハ凶暴ナ虎ガイルノデ近ヅイテ

ハイケマセン」と言いながら、右下隅に虎を1匹だけ置いて柵で囲い、それ以外は何も置かなかった。#28（個別）。田中ビネー式知能検査。問題が易しい時は「コンナノ簡単…ト言ウカ、コンナノ当タリ前デショ」と言ったが、数詞の逆唱では「書カカナキヤワカンナイ」とすぐに諦め、打数かぞえは1/sec.のテンポなのに混乱した。集中力が切れた。#29。バスケットボールのゲームに初めて入り、受け取ったボールを1、2回ドリブルしているうちにカットされてしまうと、怒りながら「ダカラ嫌ナングヨ」と頬を膨らませ、コートの外に出て、端っこでゲームを横睨みした。しかしTの実況独り言を聞きながらじっと試合を見ていた。#30（個別）。知能検査の続き。結果はIQが93、数字が不得意なこと、文章の暗記は比較的よいこと等が特徴的だった。その後女の子の絵を描いたが、「S子ッテ、ナンデコンナニ上手ナングロウ」と得意げに言った。#31（春休み）。二人で品川水族館に行った。イルカのジャンプを見て、「ネエ、写真撮ッテ」と興奮した。ヒトデに触れるコーナーで多くの子供達が触っていたので、S子にも触るかと思われ拒んだ。でも離れないので再び誘うと、子供達の間から恐々触り、嬉しそうに笑った。帰りの電車で同年齢位の女の子二人が乗って来て前に立つと、さっとTの背中に隠れた。【箱庭が、好きな人形を並べるだけではなくなくなった。#23には柵できっちり囲んで安全を確保し、さらに観音様に見守らせて動物達を楽しませ、同じ動物ごときちんと並べた。これがS子の求めてきた外部とは隔離された安全地帯であり、世界が自分の整理できるルールで成り立つことへの無意識の願望が感じられる。#26の箱庭では、天使が動物たちの前で歌っているS子の世界から遠く離れた別世界の端に、閉じ込めた虎、つまり自分を脅かすものを置いた。登場するのは人間ではなく動物ばかりなので、まだまだ抑圧は強いが、虎の登場によって、漠とした不安の中身に目を向け始めたことがわかる。それと呼応するようにTに会うとすぐに学校での自分の様子を話すようになった。漸くTに寄り添われて学校での自分に目を向けようとし始めたようであり、どしゃ降りの中を一緒に走りながら「楽シイネー」と言ったことに、S子の中に湧いている勇気を感じる。しかし、できないことへの不安の元には幼児的全能感がまだあり、やるのがわかると問題なくできるかのようにやろうとするが、現実には上手く出来ず、それはS子からすると妨害されたことになり、「ダカラ嫌ナングヨ」とならざるを得ないようである。また、初めて自分から他

児と自然に組もうとしたので、他児との垣根を下げる
ことがわかるが、そういう時に自分だけ相手がいな
かったのだから怒るのは当然だし、他児と関わる決心
をしたS子にはスタッフの思いやりは救いにはなら
なかった。気持ちが高揚すれば思いきってヒトデに触
るような勇気が出るようだが、対人関係への勇気はまだ
荒波の中である。】

第VI期：#34～#45（4月下旬～8月上旬）全12回

体育指導をどんなに丁寧にしても身体の使い方が体
得されないで、Th.Iの判断で個別活動の中に動作法
を取り入れることにし、#34は動作法SV（スーパーバ
イザー）が診断を兼ねて接した。緊張は強かったが、
SVの言葉をわかろうと見つめたりやってみようと
し、腕上げ、軀幹ひねり、頬・舌・口の周りの弛め、
膝立ち姿勢での腰入れ、立位姿勢での踵踏みしめなど
を通して、しだいに弛緩する動き（すぐ戻すのだが）
が出てきた。#35. スポーツ活動の休みが続き、久し振
りだったこの日は、外での走り幅跳びだった。踏み切
り練習の後で跳ぶことになった時、S子は「ココマデ」
と目標ラインを引いて跳んだが、膝、足首を曲げずに
真上に跳ぶだけなので、目標からほど遠かった。Tが
大袈裟に膝を曲げて両腕を後ろ引き、前に大きく振り
上げて跳んで見せると、大きな声で「アッ、ソウカ！」
と言い、似たフォームで跳べるようになり、しだいに
短い助走から踏み切って跳ぶまでの流れが出てきた。
助走を延ばすと両足がバラついたので元の練習に戻し
たが、一瞬嫌そうな顔をした後、黙って練習をした。
#38（個別）。一駅だが支線からTの待つ駅まで1人で
来るようになった。授業で逆上がりが出来なかった話
をし、「Sノ身体ハ分カッテイルダケド、膝ノ脳ミソ
ガナイダ」と言った。#39（個別）。動作法の時にTh.
IがS子に通じそうな表現で指示すると、久し振りに
「ニャー」の応答をし始めたが、Th.Iが「あっ、抜き
方がわかってきたかな？」と言うと、早口で「身体ガ
分ッテイナイラシイ」と答えた。動作に付随する不当
な緊張が減り、膝曲げがうまくできた時、「Sちゃん、
膝の脳みそあるよ！」と言われると嬉しそうに笑った。
#43. 動作法で、身体のあちこちを動かして身体感覚を
探ったり、動かす方向を指一本で指示されるだけで動
かすようになった。#45（夏休み）。二人でプール行っ
た。水を極度に怖がり、顔をつけられないということ
なので、始めは焦らずひたすらプールの淵につかり、
首の深さの中を歩いた。「絶対に手を離さないから先生

の手につかまって歩こうよ」と言うと、もの凄い力で
Tの手を握り、表情を硬くして歩き出したが、そのう
ち「コワクナイ」と言い出し、嬉しそうになった。顔
を水中で洗ったりちょっと水につけたりした後、「顎だ
け入る？」とやって見せると同じようにやり、鼻から
下、目から下、眉毛から下と下げると付いてきて、「頭
の上に手を置いて潜ると全部入っちゃうよ」とやって
見せると自然にやれた。これに自分で驚き、「頭マデ初
メテモグッタヨ！」と何度も言った。休憩中も「モグ
レタカラ、モウ一度後デヤロウヨ」と興奮気味で、そ
の後何度も潜った。プールの淵やTの両手につかま
ってのバタ足の時も何とか顔をつけられた。帰り道、「マ
マニ言ワナクチャ」と満足気だった。【動作法による誘
導を一回目でいくらか感知できた。また、顕著な身体
緊張が慢性緊張ではなく、動作に伴随する不当緊張で
あることがわかるとともに、弛緩のすぐ後の反動緊張
から、挑戦心はあるが防衛心の方が強くて、それが身
体面に出ていることが察せられた。運動の練習では、
動きの理解も動き自体も少しずつ良くなっているが、
自分の姿は依然見えていないようである。しかし、上
手く動けないことを認め始めてはおり、また擬音
ニャーによる応答は、感じるものはあるがもやもや状
態であることを示していると思われる。水泳の水慣れ
は、スモールステップが良かったのか一回で頭まで潜
れ、S子は喜びを越えた驚きを感じていた。これらの驚
くべき変化はS子に変わりたいという意志あればこ
そだったが、同時にあまりにもすんなり進んだので、
万能感を戻させたかもしれない。こうして、動作法に
よって自分の身体と向き合う体験ができ、自己動作へ
の気づきが始まり、それが頑張る気持ちを一層積極的に
したと考えている。】

第VII期：#46～#67（9月中旬～12月下旬）全21回

夏休み後も欠席が続き、9月は個別活動のみであ
った。母親はスイミングスクールに入りたいと希望した
が、Th.Iは時期尚早と判断し、母に話した。#46（個
別）。新聞紙で作ったフリスビーを持って近くの公園
に行くと小学生が遊んでいたが、S子は自然に公園に
入りフリスビーを投げ始めた。持っている方の腕を大
きく後ろに引き、大きく足を広げて膝を曲げ、思い切
り腰を回転させて投げたが、重心の移動がないため上
手く飛ばなかった。それでも投げたは走って拾いに行
くのを繰り返した。学校の運動会の見学。誰とも関わ
らず、眉をハの字にして肩を上げ、ダンスの衣装の入っ

た袋を固く抱きしめて座っていた。集合がかかるとそわそわし、みんなの動きを棒立ち状態で見ていて、みんなが歩き出すと緊張しながらキョロキョロしてついて行った。棒のように緊張したダンスであった。#50.入室するとすぐにさっと空いているトランポリンに行き、腰が引け、足首の固まった跳び方で跳んだ。跳び箱は欠席していて初回だったせい（他児は4回目）、踏み切りのための色々な基礎練習の全てで足がバラバラだった。しかし本人は張り切っていて、上手な子達と一緒に跳び箱を跳びたがった。跳べるはずはなかったが気持ちを考えて跳ばせると、跳び箱に片方の腿を引っ掛けるのが精一杯だった。#52.景信山ハイキング。登山口でよさそうな棒を拾って杖にすると、Tの棒も探し、足場を選びながら声を出してリズムをとって登った。山頂での昼食の後、ラムネを出して「ドレガイイ？」とTに差し出したので、「みんなにあげてこようか」と言うと、慌てて靴を履きみんなの方に行った。まっすぐ子どもに近づけなかったが、スタッフが声をかけてくれると嬉しそうにみんなにラムネを配った。下りは少し疲れ、みんなから遅れたが、急で足場が悪い所に来ると、「自分テ降りテミタイ」と繋いでいた手を離れた。#50.真っ先にトランポリンに行く。徐々に膝跳びや、膝打ちができるようになった。#55.跳び箱でできていないのに上のステップに行きたがるのを留めると、ふくれて外れ、座り込んでTに背を向け、周りから励まされると余計抵抗したが、間もなくTの顔をちらちら見て笑った。#56(個別)で跳び箱の踏み切りのリズムを練習をした。トトトパッパのリズムがどうしても取れないと、しゃがみ込み、怒り出し、声を荒げ、物を叩いたり蹴ったりしたが、「出来なくてもいいんだよ」と言うと静かになり、「出来ないことは悪いことじゃないよ」と言うと何事もなかったかのように自分で片づけをし、「土曜日にまた練習しようね、できるようになるよ。」と言うと黙って椅子に座った。学校の学芸会の見学。合唱でも劇でも無表情に口を閉じ、みんなに隠れるように身を固くしていた。#60.各種の踏み切り練習が少しよくなったので跳び箱4段をやってみると、両足で踏み切れ、動きは止まるものの跳び箱の手前に何とか乗れた。お尻が乗ったことでS子は進行カードに印を欲しがったが、Tが「完璧になったら印をもらおうね」と言うと、「アッ、ソッカ、ソノ方ガイイネ」と納得した。#61(個別)。学校での跳び箱の話を始め、「ナンド努力シテイルノニデキナイダロウ」と言った。また練習しようねと励ますと、

「失敗ハ成功ノ元ダッテオモウヨ」と言った後、「デモ、ヤロウトシテモ、足ガ忘レチャウカラサ」と言い、学芸会で歌わなかった歌を大声で歌い出した。#63~67.馬跳びよりも跳び箱をやりたがったが、クリスマス会でのS子の発表課題は馬跳びだと伝えると一生懸命に練習を始めた。リハーサルの時「馬跳びは一人だけど大丈夫かな？」と言うと、「ウン、ダッテSハ学校テ班長ニナッタシ、頑張ラナクチャイケナイダモン」と言った。当日、家族の前でS子はいつもより積極的だったが、手つなぎ鬼で他児とぶつかるで大泣きになった。泣き続けるのでTh.Iが「トイレに行って全部流してきちゃいなさい」と言うと、立ち上がって行き、トイレから出てくると「アー、スッキリシタ」と跳び箱発表のための練習を始め、演技発表がいつもより上手くできると満足気だった。【やりたいことがあれば知らない子どもがいる公園で遊べるようになったし、山登りでラムネ菓子をみんなに配れた時の嬉しそうな様子から他児との交流への憧れが分かるが、学校では相変わらずみんなの中にも存在していないかのようである。交流的スポーツ活動での変化が学校生活にまで届くのはまだかなり先である。トランポリンに走るようになり、熱心に跳び続けるので、これまでも本当は跳びたかったのに常に誰かしらがいて近づけなかったのかと思うが、動作の感覚が出てきたから挑戦意欲が噴出したようにも思われる。全般に動きが大きくなったので、心理的緊張の減少が動きを大きくしたことが分かる。ところで山から下りる時、S子は危険な所で取ってTの手を離れた。これは自信のある自分になりたいからであり、「自分でやらなければならない」と分かっているからである。まだ残る痼癪は、出来ない自分に直面しているからこそであろうが、しだいに自分の状態を認め、そこからスタートする素直さも出ている。しかし、認めてほしがったり、スモールステップ方式の低位練習で上手くいくと、“できる私”と思ってしまったりなど、自己評価は不安定である。さらに、手つなぎ鬼のような大勢が押し寄せるような雰囲気には恐怖症に近い恐怖があるようである。】

V. 緘黙児 S 子の変化とその意味

1) S 子はどう変わったのか

< 始めの状態 > S 子のはじめ、身体を硬くつぼめ、無表情な顔を下に向け、動かさざるを得ない時だけ最小限に動くような立ち振る舞いであった。しかし、T

に対しては小声で返事をし、誘いにも乗り、課題に対しては興味を示して大体参加した。動き方は小さくて曖昧だったが、S子はあたかもうまく動け、かつ何でも知っているかのような知ったかぶりをした。そして予期しないことが起ると幼児的な痙攣を起した。他児には全く関わろうとせず、他児がいる場所を避けた。

このあたかも固まってしまったかのような様子は、本当は自分もやりたいし、出来ると期待しているが自信はないし、見られる不安が異様に強くて、それらが内的抵抗になってやれず、周りを過敏にキャッチしている姿であることがわかる。

＜変化＞ Tを相手に人形遊びを盛んにし、しだいにははっきり喋るようになり、人形に自分のやりたいことをさせながら自分もやるようになった。Th.Iやスタッフにも擬音や人形を介して応答したが、これらの媒体は倉岳山登りで脅威に直面して、自分でやるしかないことを学んだ後に消えた。同時に最も脅威だった子どもへの態度も緩み、手をつなぐことなどができるようになった。別日にTとの個別活動も行うようになると、口にするのできなかった学校のことを、会うのを待ちかねたように話すようになった。

これらの変化と連動して、身体の異様な緊張はしだいに緩み、運動場面で予期に反することがあっても痙攣をこらえて練習を続けるようになった。とくに動作法の導入により自分の身体や動作への意識化が起り、弛緩や主導動作の感覚が出てくると、動きが大きくなり、見本を見て概ね真似られ、リズムに合わせたり隊形移動したりが出来るなど、運動面にはっきりした変化が現れた。

2) S子の特徴的行動の意味

＜人形遊び・擬音＞ S子は人形とともにいた。始めは沢山の人形を持参して一つずつ見せ、説明し、家族ごっこや友達ごっこをまるで幼児のように役になりきってやった。S子にとっては人形こそが友達なのだと思われた。しかし、人形にボールを蹴らせては次に自分が蹴るようになった時、人形は、対人不安やからだを動かす不安、つまり自分が他者に見透かされることへの不安・緊張を緩和させるとともに、必要な行動をイメージさせる媒体をしていることがわかった。そしてそこから逆に、それ以前の人形に喋らせたり擬音で応答したりをはじめ、スケボーに乗る前にまず人形を乗せたことや、日常生活を展開させた学校ごっこや友達ごっこさえも、対人関係の練習でもあったことが推察された。人形は替え玉であり、信用できる替え玉

がいることで安心でき、自分で自分を支えるような力で不安な場面・行動に挑戦出来るのだらうと思われた。ということは、擬音や人形の介在が消えたことは、人前に替え玉ではなく、自分自身を晒すことができるようになったわけである。この変化は、S子の中に全能感に代わって有能感が出てきたことを示すと考える。

＜痙攣行動＞ リーダーが指示を訂正した時の痙攣から始まり、倉岳山ハイキングの時、ボールが当たった時、ペア練習の相手がいなかった時、ドリブルをカットされた時、跳び箱の踏み切り練習が分からなかった時などに痙攣を起した。泣き喚きをベースに、物に当たったパターンだったが、始めは一旦起すとエスカレートし、長引いた。しかし、しだいに起し方が小さくなり、治まりが早くなった。人前で痙攣行動を起すこと自体が幼稚だが、幼児のように泣き喚くを見る度に、わがままさも感じ、痙攣を起すことでわがままが通ってしまい、それが欲求不満耐性の形成を阻害したのだと思われた。しかし、起す原因は概ね幼稚だったが、同じ原因ということではなかった。経験による学習があったのである。情緒コントロールが出来ないだけと見えたのに、痙攣を通して恐怖の原因を自分なりに察知し、同じ失敗を繰り返さない工夫・準備をして次回には挑戦した。つまり痙攣は回避ではなく、克服に繋がっていたのである。また、始めは痙攣を通して自分に起るはずのないことを自分にも起ることとして受け入れたが、克服法としては一層保護を強靱にする方向だった。それが、逃れたくても逃れられない場との直面であった山登りでの痙攣を通して、信頼している保護者をもってしても自分の安全が守られないことがあるという現実を受け入れた。出来ると思っていたのに出来ていないことに直面させられて痙攣を起した後は、怒りの相手が自分自身であることに気付いたのか、「アッ、ソッカ、ソノホウガイネ」と自己コントロールするようになった。

3) 変化の構造

変化はいろいろな要因の絡みによりもたらされた。まず、内的要因としてS子自身の気持ちや挙げられる。S子は表面的には幼稚でわがままな関わりにくい子だったが、保護された別世界、つまり安全地帯から出たかったからこそやって来たのだと考える。Tへの応答の始まりが早かったこと、対人的不安や行動上の不安を擬音や人形で和らげながら求められる行動を行ったこと、恐怖・悔しさ・腹立ちにより痙攣を起したが逃避も回避もしなかったこと、これら全てS子が外側

に出ることを強く望み、ここで頑張ると決めて来たことを示している。外的要因としては、交流的スポーツ活動の仕組み（Ⅲを参照）や動作法の機能がある。交流的スポーツ活動の中で、S子の個別援助者であるTがS子の安全地帯に入ってS子を母親的に外側にいざない、外側には父親的存在のTh.Iと他のスタッフがいてS子の心身の状態を受けとめ、努力や勇気に応じて必要な関わりを行えた。またS子が最も脅威とする子ども達が、直面が避けられて望めば関われる距離にいて、少しの勇気で一緒に集団ゲームやスポーツ技能の練習に励むことができた。また活動内容を柔軟に工夫し、山登りのような逃げようのない場も設定できた。一方、動作法の中で自分の身体と向かい合えたことも効果的であり、「ココガウゴカナイ」「膝ノ脳ミソガナイ」が示すように、幼児的全能感で自分は出来ると思っていたS子が、自分の身体を意識し、自分のまずさを受け入れることができた。まずい自分の状態を受け入れるのはきついことであるが、真の学習のスタート地点に立つことを可能にしたと考える。

VI. 結び—安全地帯からの 脱出における努力と怒り—

S子を何とか周囲に馴染ませようという努力は両親によってなされてきたに違いないが、どうにもできない拒否に退くしかなかったのだろうと思われる。一方、他者と直面できないS子に出来たことは、他者の中にいて存在していないかのごとく、喋らず、交わらず、身を固くすることであり、嫌な時は安定が回復されるまで泣くことだった。周りは、喋らない子、特別扱いしないとイケない子として対応し、欲求や気持ちを推測し、保護した。こうしてS子は結果として、みんなの中にながら周りから隔離された安全地帯で生きることになったのであろう。しかし、発達する人間は安全が確保されると停滞してられないので、安全地帯の中のS子の心には外側との繋がりへの要求が喚起されたと思われ、それにより今度は脅威を背中ではなく胸で受けることとなり、S子は一層緊張し、やはり動くことも喋ることも出来なかったと考えられる。相談室通いは、外側への糸口を求める気持ちが芽生えていたことと上手くマッチし、そこから繋がれた交流的スポーツ活動もまた、S子の成長を助ける展開であった。

この活動において、S子は基礎的な身体操作力をつけ、対人態度も少し緩和させたが、同時にその努力の

中で次のような大切なことを知った。

「守られるはず」→「守られないこともある」
「逃げられる」→「逃れられないこともある」
「自分はできている」→「自分はできていない」
「出来るはずがない」→「こうすればできる」

安全地帯からの脱出は、S子が健全に成長するために避けられないテーマであるが、S子にとっては巨大な課題でもあるから、受容的環境において努力さえすれば達成されるという簡単なものではない。期待通りに進まないことを怒りながら努力し続けなければならない。S子のこの1年7ヶ月は、安全地帯からの脱出をまさに努力と怒り中で行おうとした過程であり、これからもその道を口を尖らせ、頬を膨らませながら歩いていくことになるのだろう。それはしかし、学校がその場になるまでは、怒りつつも歩ける場がどこかなくてはならないということであり、その場がなければ再び安全地帯に戻るしかなく、しかし安全地帯は既になくて、新たな問題の道に入る可能性が高まるということである。

<付記>S子を担当したのは関、心理学的考察ならびに全体の責任は石川に帰せられるものである。

引用・参考文献

- 1) 福島脩美・松村茂治(1982):「子どもの臨床指導—教育臨床心理学序説—」196-203, 金子書房
- 2) 河合隼雄(1969):「箱庭療法入門」誠信書房
- 3) 河井芳文・河井英子(1994):「場面緘黙児の心と指導」田研出版株式会社
- 4) 村上凡子(1998):低学年緘黙児に対するコラージュ療法適用の事例 日本心理臨床学会第17回大会
- 5) 成瀬語策(2000):「動作療法」誠信書房
- 6) 西 俊之(1990):場面緘黙児・M子の事例から 教育相談研究紀要21巻 日野市教育相談室教育委員会
- 7) 小川素子(1996):ある場面緘黙女児との遊戯療法過程 心理臨床研究第14巻第3号 353-364
- 8) 大井正巳(1979):児童期の心理と精神病理:現代のエスプリ別冊 子どもの心理 97-116, 至文堂
- 9) 全国情緒障害教育研究会編(1973):「障害児の教育緘黙・孤立児」日本文化科学社
- 10) 十亀四郎(1973):「講座情緒障害児③自閉症児・緘黙児」159-207, 黎明書房
- 11) 内山喜久雄・坂野雄二(1989):「情緒障害児双書⑤無気力・引っ込み思案・緘黙」黎明書房

(平成15年9月24日受理)
(平成15年12月11日受理)